

## ニュー・ジラントで感じたこと

森 宏

## I Does a Kiwi Need a Vacation ? —— 日本人は働き過ぎか？

## 1. 迷惑な主任の長い Vacation

2月9—11日、キャンベラで開かれたオーストラリア農業経済学会の昼休みでのこと。91年4月の輸入自由化前後における日本の牛肉市場の新展開について、共同発表したクインズランド州第一次産業省のイアン・ジャラットの言葉に私は年甲斐もなく思わず激昂した。「アラが PECC（環太平洋経済協力委員会）のことで時間を取られて困っているとばやいてい

## 目 次

I Does a Kiwi Need a Vacation ? —— 日本人は働き過ぎか？	1
1. 迷惑な主任の長い Vacation	1
2. ニュー・ジラント人の Vacation	3
3. 働かなさ過ぎ・寝過ぎと病める経済・社会	5
4. いつ迄も羊の「勤勉」にばかり頼ってはいられない	9
II 芯のあるごはん —— QC（品質管理）のころ	10
1. 私の「銀しゃり」と「雀も食べないマッシーの Asian Meal」	10
2. 解けた「ベチャベチャ・ゴリゴリ」ごはんの謎	12
3. 日本人・韓国人とごはん	13
4. 「こちらの人」になったらおしまい	15
III おわりに一言	16
<編集後記>	18

た」と聞かされて。

アランは、私が専大を一年休職して客員研究員として働いていたニュー・ジランドのマッシー大学の農業経済学科の主任教授である。5月にハワイでPECCの農業・貿易作業部会の報告会が予定されており、アランが取り仕切っていた。

前年の12月25日だったか、日本との急な連絡で学科事務室に入ったところ、アラン宛にPECC関係のファックスが2～3通届いていた。急ぎの用かも知れないのでアランの自宅に電話したところ、「今日はクリスマスだろう」と、にべもない。

私は陽気が反対の年末・年始にいささか戸惑っていたし、朝か夕方に屋外プールで泳ぐ以外にはすることもないので、殆ど毎日ふらりと研究室に出掛けていた。クリスマスの休み中(12/25—1/5)は大学の交換も切れて外部との電話連絡は出来ないのも、学科事務室のファックスだけが外界との連絡手段であった。

1月5日迄の間にアラン宛のファックスは10通近くたまっていたが、12月25日に着いていた分を含め、機械の受け台の上にそのまま手つかずであった。アランはクリスマス休み明けの1月6日にはしばらくいたようだが、翌日から姿を見せない。1月24日(金)迄 vacation で、家族と一緒に南島に行ったとのことであった。

マッシー大学での若い共同研究者、ドリン・チャディと私は、上記の学会での報告を兼ねて、クインズランド大学および同州第一次産業省で別の報告をすることになっていたし、オーストラリアに進出している日本資本の牧場・屠畜処理場の見学などを予定していた。出発予定日は2月4日であった。

旅行の費用はドリンがとってきた外部資金から出るのだが、飛行機を予約するにしろ、割安のホテルとのパッケージを購入するにしろ、国立大学として所定の手続きをふまねばならず、そのためにはまず主任のサインが必要である。主任代理のアントアンがフィリッピンに長期出張中とあって、正式な手続きはアランが vacation から戻って来る1月27日(月)迄待たねばならない。

学科事務室にセクレタリーが2人居るのだが、主任が vacation で居ないとなると矢張り仕事の集中度は低下する。2人でえんえんとおしゃべりするし、しばしば他の学科のセクレタリーも参加する。ニュー・ジランド(の大学)では、午前中は10時から20～30分、午後は3時から同じくらいのティ・タイムがあり、スタッフ・ラウンジに集まっておしゃべりを楽しむ。農業経済学科のセクレタリーは4時30分に帰宅するのだから午後のティー・ブレイクはなくてよさそうなものだが、主任がいないとティー・タイムから帰って来たと思う間もなく姿を消してしまうことがある。

キャンベラの学会で一緒に報告することになっていた上記イアンは大変熱心な人で、こちらが粗書きした原稿にいろいろ注文をつけてくる。手直してファックスで送る。そうやって幾度か練り直した成果が、表や図を含めてコンピューターのディスクットに残っていく。学会への出発が近づいてくると、そうしたプロセスが頻繁になるが、セクレタリーに金曜日の午後などすうっと姿を消されると、われわれだけ週末に出て来ても、仕事が先に進まない（ということもあって、1つのペーパーは全部ドリンが処理した。パソコンの普及と共に、手紙類も全部自分でタイプするという先生方も多い）。

待っていたアランが1月27日になっても出て来ない。「素晴らしいので vacation を一週間延ばすことにした」のだそうである。カナダ出身のドリンと私は開いた口がふさがらない。一層まずいことには、われわれのペーパーをタイプしてくれていたセクレタリーの1人が、1月30日（木）から vacation を取っていなくなった。残ったもう一人のセクレタリーは「最終的なディスクットはドリンに渡してあるはず」と言い張るが、ドリンのファイルにはどこを探してもない。

「そういう事もあろうかと思って」、ドリンが外部の業者に最終のタイプを頼んであったので事無きをえたが、われわれがキャンベラに出掛ける前にはいくつもそういうことが重なっていたのである。「PECC の雑務で時間を取られて困る」に、「エッ、何だって?」と思わずどなったとしても理由なきにしもあらずではなかろうか。われわれはアランの vacation で迷惑したが、アランが PECC の雑務で忙殺されていたとは思えないのである（もっとも vacation から戻ってキャンベラの学会に発つ迄の数日間に、年末からたまっていたファックス類に急いで返事せねばならなかったであろう）。

## 2. ニュー・ジランド人の Vacation

アランが幾人かの人に語ったところでは、南島での vacation は大層素晴らしいものだったそうである。天候は良いし、テニスをしたり、川で泳いだり、大いにエンジョイしたという。しかし「待てよ!」である。東京や大阪の住人が、ゴミゴミした空気の汚れた都心の狭い3DKのアパートから逃げ出し、箱根や信州に2~3日でも休暇を過し、「家族ともくつろげたし、いい休養になった」というのとは違う。

私共のマッシー大学のあるパルマストーン・ノースは、肥沃な緑の農村に囲まれた人口5~6万の小都市（日本の規準）である。広々した四季折々の美しい花の絶えない公園があちこちにある。中高層のアパートなどなく、個人の家も広く美しい庭園にめぐまれ、住民の目を楽しませてくれる。オリンピック・サイズのプールが2面ある市営プールがあり、豊島園のよ

うな混雑はまずみられない。大学の下にきれいな川が流れ、そこで釣りを楽しむことも出来るし、少し下流では泳ぐことも出来る。立派なテニス・コートなどどこにでもある。それに空気は澄んでいるし、真夏でも（12月～2月）じとっと汗ばむことなど殆どない。

借りていた家の大家さんが南島の出身でしきりとすすめてくれ、格安の航空券の広告を持ってきてくれ、クライストチャーチに住む御両親からおさそいの電話があったりしたため、私共も12月に南島に5泊の旅行をしていた。日本から来られる旅行者は口を揃えてクライストチャーチの町並みやクインズタウンの周囲の美しさを賞めそやすが、北島の変哲ない大学町パルマストーン・ノースと比べて格段に美しい訳ではない。

ところで山間のクインズタウンに3泊した間、折悪しくしばしば天気が崩れ、外での行動を制約された。日本の標準からするとなかなか広い部屋だが、雨で外に出られないとなると、丸ですることはなく、気が滅入る。ホテルでは子供連れの客が大半であったが、家内も私も印象的であったのは、子供達が騒いだり、けんかしあったりして隣室に迷惑をかけるなどということがないことであった。時折り晴間がでると親の後にくっついて町中に出掛けてゆくが、その時も余りはしゃいだり、いちゃついたりしない。

北島のオークランド辺りから来ると、車で片道3日はかかるであろう。私の子供達のことを振り返ってみると、2～3時間の小旅行でも後部座席では退屈した子供達がけんか・じゃれあい、こちらはどなって大変であった。ニュー・ジランドのドライブはまわりの自然が美しい、牧場の子羊が可愛いらしいなどといっても、どこに行っても余り変りはない。

ニュー・ジランドのホテルには、キッチン付きのところが多い。大半の家族は旅行に出かける時はアイス・ボックスを車に積み、なるべく外食しないようにする。週末は閉じている食べ物屋が多いこともある。目的地に着くと近くのスーパーで材料を仕入れ、ホテルのキッチンで簡単にちゅーちゅーやって夕食にする。彼らは一般に夕食が早いから、夜は長い。その事については後述する。

休暇の意義は、休養する事を含め日常性からの離脱・解放にあるのではなかろうか。家具で埋まった3DKからさっぱりしたホテルの寝室、狭いDKでの食事から豪華なホテルでのワイン付きの夕食、奥方にとっては2～3日料理のことを忘れ、後片付けのおずらわしさからも解放される。やがてそれらの効用は逡減し、他方そのコストの高さにおののき始め、「もう帰ろう。矢張りウチが一番」ということになる。それで休暇は十分意味のあるものであったということになるのであろう。

家内とも話し合ったのだが、クインズタウンで会った子供達の小羊のような大人しきは一体どういう事なのであろうか。恐らくあれでは、既存の価値観や習慣を打ち破り、新しく活

気に満ちた社会を築き上げていくことは期待出来ないのではなからうか。1930年代後半には1人当たりGNPで世界一だったニュー・ジランドが、やがて3位になり、10位に落ち、10数年前には我が国に追い抜かれ、昨年は香港の後になった\*ことと、間接的に無関係ではないように思われる（\*マッシー大学長ウォータース教授談）。

アランが「われわれ家族は南島での vacation を大いにエンジョイした」という時、彼の奥さん、子供達を含め、本当にそうだったのだろうかと思う。かれらはパルマストン・ノースの高級住宅地に1,000㎡に近いゆったりした芝生にかこまれた、素敵な家に住んでいる。唯一の不満は芝刈りとペンキ塗りが大変なことだけだろう。

現在のニュー・ジランド経済で大学教授の収入では、それ程たっぷりした vacation が楽しめる筈はない。モテルの部屋だって自分達のウチより小さく粗末だろうし、台所や食事をするところも貧弱なものにきまっている。山や川辺でキャンプをするのなら、小さな寝袋も、お鍋1つ、バーナー1つというのもまた良きかなであろう。しかしそれとは違う。

ニュー・ジランドを出たあと、米国と欧州を廻ったが、スイスのユング・フラウ、アイガーをみでの帰途、山岳電車でたまたま乗り合わせた日本から来られたある初老の紳士のお話しが印象的であった。奥様と一緒に旅行だが、この電車では別々の車輛、理由は「自分はヘビー・スモーカーだが、家内はいやがるので」といとも簡単。スイスの物価高にたまげていたわれわれは旅慣れておられそうな件の紳士に前夜のホテルの料金をたずねた。矢張りわれわれが払った料金より幾分安い。「但しその2倍ですけど」と何気なく付け加えられた。「海外旅行をすると夜中に目が覚めたり、2人の体のリズムが合わないことがしばしばおこる。そういう時独りだと本を読んだり、手紙を書いたり気俣に行動出来るけど、同じ部屋に2人だとそうもいかないのです、少々高くついても別々の部屋をとることにしている」との説明であった。私はどこでも大酒飲んでいびきをかいてねる方だが、それでも氏の言われることはわかる。私の家内など同感するところしきりであった。

### 3. 働かなさ過ぎ・寝過ぎと病める経済・社会

2人の男の子が社会人になってしばらくになる。拙宅から通勤していた時、今より景気が良かったのであろうが、会社を出るのが零時過ぎという日が少なかった。終電近くになると駅で長いタクシー待ちの列ができ、雨の日など一時間以上待たされることがある。そこで家内が車で迎えに行くことになる。

こういう話をニュー・ジランドの人にする時、「極めて非人間的。そういうのは Life ではな

い」とあきれかえる。私自身は国の研究機関と本学に教員として奉職して、世間一般の職経験はないが、卒業して普通に就職して普通にえらくなっていった友人のなかには、「ウチでまともに夕食を食ったのは1ヶ月に4～5回がせいぜい」という人が少ない。「それで良く奥さん達がだまっている。Yoko（家内の名前）、あなただったらどうする」とかれらはきく。家内は不十分な英語力ながら、日本では「亭主丈夫で留守が良い」と良く言われているがとこたえる。

「そんなことではもはや家庭生活が崩壊している」とかぶせてくる。しかし日本についてそれを言う資格は残念ながらニュー・ジランドの人にはない。私は尋ねる。「どっちの方が離婚が多いか」と。離婚する割合はニュー・ジランドの方が圧倒的に高い。こういう統計の直接的な国際比較はしばしばミスリーディングなことが多いが、そういう留保を付けても、現在結婚している夫婦で離婚する確率はニュー・ジランドの方がはるかに高いのは疑う余地がない。本稿でそこいらの議論を厳密にやるつもりはないが、ここで付け加えたいのは、近年における日本の離婚のピークの一つは、50～60歳台という事実である。どうも亭主が定年退職して、いつもうちに居て夫婦で四六時中顔をつき合わせるようになってから危機が始まるといううがった解釈がある。

私にはしかと理解し難いことだが、ニュー・ジランドに行って新聞紙上などでしばしば目にするのが、「チャイルド・アブユース（児童虐待）」の報道である。女兒の3～4人に1人が、（男）親をはじめとする近親者に性的にアブユーズされているといった推計が、かなり共通なものになっている。かりにそれが継父によるものであろうとなかろうと、これはまさに社会的に異常であるとしか言いようがない。

私には実態についての想像もつかないので、以下はまことに無責任かつ感覚的な仮説にすぎないが、私はその事について一つの診断を持っている。ニュー・ジランドの女性は若いうちはきれいだが、24～5歳をすぎると急速に老化し、しばしば巨大になる。

ニュー・ジランドに行つてはじめての頃は、公園や乗物の上などで子供をあやしている女性に、「可愛いお孫さんですね」とお追従を言ったり、言いかけたりして、ドリンや他のアメリカ人の同僚にあわててたしなめられたことがある。同じアングロ・サクソン系の白人でも、ニュー・ジランドの婦人はアメリカの人にくらべ10歳早く老化するそうである。私はアメリカ人は良くみているが、35歳のニュー・ジランドの女性がアメリカの45歳位の女性に相当するというのは、あながち間違つた観察ではないように思われる。

男として、自分の女房がはやばやと老化して、さらに巨大になれば、心理的にも欲望の対象が他にむくのはしょうがないことかもしれない。しかも週日でも夕方5時半か6時には帰

宅し、6時半に夕食がおわれば、広い家の中で夜は長い。週末も芝を刈る以外には他にすることもない、となるとである。

私は世間の定年間近になってから過去8年間くらい、毎年春と夏、本学の休みが始まるとすぐにアメリカに行き、休みが終るその日に日本に戻るという生活パターンを繰り返してきた。むこうでは朝8時半くらいから夕方7時か7時半迄大学の研究室で過す。ウチまで車で10分足らずだから、帰宅してゆっくりビールを飲み、仕上げはウイスキーをちびちびと時間をかけても、夕食を終えた後の夜は長い。

ところでニュー・ジランドの人達は一般にベッドに入るのが恐ろしく早いように思われる。マッシー大学で親しくなった中年の女性の研究者が、普通9時半か10時に“go to bed”するときいて、家内と私は英語の聞き違いではないかと、きき返したものである。ベッドに入っても本など読んでいるとのことであつたが、部屋が寒いから掻巻にくるまって勉強するというのとは違う。早いのは彼女に限らない。夜10時過ぎて帰宅すると、道すがらの大抵の家は明りを消して静まりかえっていることが多い。マッシー大学の農学部の大学院にきていた石田君は大学の寮(ホステル)に住んでいたが、「こちらの学生達は、まるで子供のよう(ねるのが)早いんですね」と感心していたから、ニュー・ジランドの人達の就寝が一般に早いというのは、そう片寄った観察ではないのであろう。

最近日本でも時々話題になっているが、ハラシオンという睡眠薬がある。英国の実験結果では記憶喪失などの副作用があるというので、英国では91年10月に全面的に使用が禁止され、それを受けてニュー・ジランドでもその販売(医師の処方による)を禁止すべきかどうかで大きな問題になった。

私が驚いたのは、ニュー・ジランド人の15%近くがそれを服用しているらしいとの新聞報道である。首都ウェリントン発行の全国紙『ドミニオン』(1991年10月4日)によると、「50万人以上のニュー・ジランド人がハラシオンを服用しているらしい」といい、パルマストーン・ノースの夕刊紙『イブニング・スタンダード』(同年10月4日)も、保健省の薬事審査委員会の座長のギャビン・ケラウェイ氏の言として「ニュー・ジランド人\*の15%近くがハラシオンをのんでいても、自分はびっくりしないだろう」と紹介している(\*総人口は約350万人)。

子供や若い人達は一般に睡眠薬を必要としないであろうから、総人口の15%というと壮年層以上の3割近くがのんでいることになる。この推計はいくらなんでも高過ぎると思われた。それから間もなくしてマッシー大学で日本関係の小さな学会が開かれ、私もリセプションによばれた。同席した哲学科の教授夫妻にその話しをもちかけたところ、夫人の方は「自分は

その数字に驚かない。女性だけをとると割合はもっと高いのではないか」、「社会の変化の負担が女性にしわ寄せされて、ストレスがきついついから。例えば、女性も結婚後働かねばならなくなったが、男性は一般に家事その他に協力的でないから」と言う。

明るい太陽、緑、ラグビー、ヨット、反核、……など“クリーン・グリーン・ヘルシー”が、一般のニュー・ジランドについてのイメージである。外から見ると確かに「クリーン」（空気はきれい、通りにカンやびんが散らかっていないなど）、「グリーン」は全くその通りだし、人口100万人足らずのオークランド市の湾内に、数万艘のヨットがうかんでいるという。世界的にオール・ブラックスの強さはつとに有名だし、ティー・ブレイクの時、ラウンジではクリケットの話がはずむ。しかし総人口の15%もの国民がハラシオンに頼っている（“if as many as 15 percent of New Zealanders were on Halcion”としても驚かない、Gavin Kellaway, op cit）となると、内部は意外と病んでいるとみなしなければならないのかもしれない。

日本でも私の身近かにハラシオンを常用している人がいるし、私自身海外旅行をする時など、時差ぼけを防ぐためにお世話になっているので、ハラシオンについては割と理解のある方である。しかしニュー・ジランド人の高率の服用については、私の見方はかなり厳しい。一口に言って「ニュー・ジランド人は寝過ぎ」なのである。大人が毎日8時間も10時間も寝ようとする、なかなか寝つけないであろうし、途中で目が覚めるかもしれない。そこでハラシオンが必要ということになる。

社会人になった私の2人の子供と、深夜の出迎え、朝の目覚し代りをつとめる家内などをみていると、よくこれで体がもつと感心する。しかし話しをきいてみると、日本では彼らだけが例外的という訳ではなさそうである。時間は短くとも恐らく眠りが深いのであろう。また「ハナ金」のあと土曜日の寝だめも有効である。こういう人種には一般にハラシオンは必要でない\*（\*体質的、あるいは病気としての不眠症に私は十分の同情を持っているつもりである）。

11～12時帰宅、1～2時就寝、朝7時起床、満員電車にもまれて9時から仕事の毎日を話すと、ニュー・ジランドの人達は「それでは健康がもたない」と言う。だがしかし、日本は最高の長寿国になっている。食事の関係\*もあるのであろうか（\*肉類のとり過ぎ、単調な食内容）、ニュー・ジランド人の平均寿命は男・女とも近年の日本に比べ10歳前後低い。それに人々の仕事のきめの細かさ、注意の集中度などに関し、ねむい筈の日本人にくらべてまさっているとはお世辞にも言えない。

農学部の郵便物のデリバリーを一手に引き受けていた初老のトニーは、先生方より英語が



わかり易いし、こちらの言うこともゆっくり聞いてくれるので、ティ・タイムの時はよくおしゃべりをした。彼の前歴はBMWとある日系のグラージの職人さんで、近年電気系統が余りにソフィスティケートされてきてついていけなくなったので、折をみて転職してきた人である。

ある時彼がこういう事を言った。「グラージで働いていた時、こちらで組み立てられた新車が入荷すると、必ずドアとかフードなどを外してつけ直したものである。しかし日本で組立てられたものは同じ車種でも、そうする必要はなかった。日本から荒れた洋上を2～3週間もゆられて入荷すれば、ボルトやネジがゆるんでいるだろうから締め直すというのなら理解し易いのだが、その逆だから」と半ば自問自答した。

その事との関連で言えば、ウェリントンの郊外のミツビシの自動車（組立）工場では、昨年未かなり長期間のロック・アウトがあった。景気が低迷するなかでの賃上げを認める代り、7日間だけの有給のシック・リーブを廃止するというマネジメントに対して、労働側は激しく抵抗したのである。経営側は「実態として病気休暇が通常のvacationに接続して利用されており、本来の趣旨から外れている」と言うのであった。私はかなり左の方だが、トニーの言葉を借りれば、「ボルト1つきちんと締めていない労働者に、これ以上休暇は与える訳にはいかない」に与したくなる。主としてマッシー大学での限られた個人的体験をもとに、そういう風に思うのだが。

#### 4. いつ迄も羊の「勤勉」にばかり頼ってはいられない

現在でもニュー・ジランドの商品輸出の大半は農・林・畜産物で占められている。製造工業のウエイトは小さい。国の研究予算に占める農業関係の比重をみても、ニュー・ジランドはいまだかつての農林・牧畜国のあとを引きずっている。

牧畜について言えば、ニュー・ジランドほど生産に自然をうまく取りこんでいる国を私は知らない。羊、乳牛、肉牛の放牧の仕方や草地の管理は、自然の恵みを最大限利用しつくすように仕組まれている。郊外をドライブする度に家内が感心するのだが「ニュー・ジランドの羊達は本当に勤勉、朝から晩までいつ見ても（草を）食べている。余程おなかがかすいているのかしらね。」しかし動物達をそうしむけるのは実は大変な仕事であって、放漫に放牧すると、飽食・草の食べ残しが生ずるし、あまり過密にやると草の根まで食べられてしまう。たえず見張って、タイミング良く家畜を移させねばならない。乳牛の場合当然ながら朝・晩搾乳しなければならないし、羊の毛を刈るのも季節が集中し、いかにもつらい仕事である。旅行者には一見のどかにみえる農村も、なかで働いている人間にとっては気を抜くことの出来

ないつらい毎日なのである。

それでも冬になると草の生長が停止し、家畜達はいわば「半冬眠」状態\*においこまれる(\*乳牛は生存ぎりぎり、乳もでない)。恐らくその間の2～3ヶ月が農家にとって、自然とのがぶり四つから解放され、リラックスできる休養の時期なのである。

家畜達のことを忘れ、クルーズで温かい北半球に出かけるのもよし、祖父母達がやってきた英国に里帰りするのもよしである。これこそ vacation の名に値する。

だんだん都会に移り住むようになって、寝たり食べたりする習慣は早急には変らない。明け方3時か4時に起きる必要もなく、激しい肉体労働もない。しかし相変わらずたっぷり夕食をとり、早めに床に入る。それでは睡眠薬の助けも必要になるだろうし、24～5歳をすぎるとぶくぶくと脂肪がついてくるというものである。週末はたっぷり休み、おまけに家族で長期の vacation となると、互いに鼻について離婚に発展するのは自然の成り行きかもしれない。

Kiwi (ニュー・ジランド人の愛称) はけだるい眠りから覚め、もっとしっかり働くべきだろう。1年近くニュー・ジランドにいる間中、ほとんど毎週のように、GATT のウルグアイ・ラウンドの妥結近し、そうすれば農産物の国際市況は回復し、ニュー・ジランドに春が来るかのような論調がマスコミをにぎわせた。しかし長い目でみて、羊や牛の「勤勉」にだけ頼っていたのでは、ニュー・ジランドの明日はないように思われる。

## II 芯のあるごはん——QC (品質管理) のころ

### 1. 私の「銀しゃり」と「雀も食べないマッシーの Asian Meal」

ニュー・ジランドに行って全く予期せざる嬉しい発見の一つが、お米が安くて、けっこういかすということであった。

1kgの小袋でNZドルで、1ドル40セント前後(5～10kgの袋でも単価は殆ど変らない。時としてかえって高い場合もある。口の悪い奴の云く「計算出来ないからではないか」)であった。91年9月頃のレートで日本円にして1kg120～130円、NZを発った92年7月のレートでは1kg100円前後だから、日本に比べて1/4くらいであろうか。

問題は品質・味の点だが、私共は概ね満足していた。自動炊飯器がなかったので、普段は私が、終戦直後高校の寮で飯盒炊飯した経験をいかして、厚目のお鍋でたいていたが、5回に4回はまずまずのたき上りであった。家内も私もお米には余りうるさい方ではないが、オーストラリア産の長粒種を6、同じオーストラリア産の短粒種を4くらいの割合でたくと、

油っぽい肉類の多いおかずには丁度合うのであった。今年4月に遊びにみえた家内の友人で東北出身の方が、「銀しゃり」と賞めて下さったから、品質については全く比較にならないという程悪くないと考えてよいように思われる。このところ10年近く1年のうち3~4ヶ月を米国で生活してきたが、カリホルニア産の「ローズ米」などと比べても、殆ど遜色ないと思われた。ウェリントンなどにいくと、20~30%割高のカリホルニア米を扱っているところもあったが、私共は買う気にならなかった。

オーストラリア産にしろ、カリホルニア産にしろ、たきたては一応いけるのだが、時間がたつて翌朝とか次の日の弁当に持ちこすとばさついて、ほとんど「ごはん」という感じがしなくなる。これは私たちだけの評価ではなく、ニュー・ジランドのみならずシドニー在留の多くの日本人の一致した意見であり、「 $\alpha$ 化のスピードが云々」と科学的な解説をして下さった方もいる。但しこの点は本稿のポイントとは直接関係ない。

さて91年9月にマッシー大学に落ち着いてから当座は、昼食はドリン達と大学の学生食堂に出掛けていた。ニュー・ジランド人の典型的なお昼は、“フィッシュ&チップス”で、鱈に似た魚のフライに太目のポテト・フライが並の日本人にはとても食べられない位たっぷり出る。あるいは大きなバン (bun) にロースト・ビーフかロースト・ポークをはさんだサンドイッチとポテトチップスの組み合わせである。何時頃からか知らないが、大学のキャフテリアには Asian Foods のコーナーがあり、肉と野菜類をいためたのと白いごはんの組合せと、“Asian Meal”とって、肉や魚肉ソーセージとにんじん、とうもろこしなどごちゃごちゃにいためたフライド・ライスなどがある。いずれもコーヒー・コーラなどの飲物と合わせて、5~6ドル(4~500円)くらいであろうか。

大したバラエティーでないが、勉強のために、1つ1つためしてみた。フィッシュ&チップスはどうも合わない。よくもこんなもの毎日食べていられると思うが、日本人がラーメンやざるそばをあきずに食べるのと同じことであろう。ドリン達は遠来の私に合わせて Asian Foods を食べようというが、これは大変に危険である。これを本稿のテーマにしたいと思う。

何故リスクリーなのかというと、われわれ日本人にとって食事の中心であるごはんのできが安定していないからである。昨日まあまあだからといって今日もそうだとは限らない。べちゃべちゃだったり、バサバサだったり、生煮えでガリガリだったり、不思議なことにそれらの組合せであったり、まことに安心できない。油いための“Asian Meal”の場合、さすがに生煮えというのは少ないが、やたらにドチャドチャと油っぽく、思わずはき出したくなるような時もある。すてるのも勿体ないのでうちに持ち帰り、翌朝台所の前の庭にまいたが、私が

たいごはんなら20~30羽の雀が集まってものの4~5分で跡形もなくなるのに、その時ばかりは2~3日たって、芝生のミミズをほじくる黒い鳥がようやく片付けてくれたような始末であった。「ウチの雀も食べないマッシーのAsian Meal」というので、しばらく悪口を言われることになる。

国際交流基金の代表がシドニーからみえた時、学長の公舎で昼食のレセプションが開かれ、主に日本関係のスタッフが招待された。「今日は皆さんのために steamed rice もたっぷり用意しているので、エンジョイして下さい」と主催者はお世辞が良い。学生食堂だけでなく他のところでも経験していたので、私はごはんについては用心深くなっていた。大きじでほんの1~2はいお皿に乗せて食べてみる。ふわっと炊き上っているようだが、どことなく生煮えである。家内の母親のところでも出される、二日酔の時でも、のりとぬか漬とみそ汁があれば2はいでも3はいでも食べられるというのから、はるかに遠い。

ニュー・ジランドに長い幾人かの日本人の方は、「森さんごはんはいかがですか」としきりにすすめてくれるが、私は固型物には興味を失い、普段昼間は飲まないことにしているワインとチーズくらいですますことにした。

「どうも芯があるようなので」が、それらの日本の人にも通じない。「スティッキーなのを好むのは日本人だけで、中国でもネバネバはふきこぼして“フラフィー”にするんですよ。こちらの人はもっとそうですから」と、私の「片寄った」嗜好をさも非難するようにいう。上述したが、私はうちでは長粒種6と短粒種4くらいの割合で炊き、油っこい副食にはそれくらいが良いと思っている。問題は“フラフィー”か“スティッキー”かではない。ふんわりと芯までよく炊き上っているかどうかを問題にしているのである。

ニュー・ジランドに長いそれらの日本の方に、「芯のある」というのは英語ではどういえば良いのでしょうかと尋ねたが、その事をしかと理解して下さらないので、満足のいく回答はえられなかった。

## 2. 解けた「ベチャベチャ・ゴリゴリ」ごはんの謎

マッシー大学での私の共同研究者ドリンは生れは印度洋のモーリシャス、高校からカナダに渡り、大学院を終えてからカナダ人の奥さんのドナとこちらの大学に赴任してきた。2人とも若いのに大層気くぼりのいいカップルで、家内が老齢で病気がちの母親をみに日本に帰っている時など、しばしば自宅に招待してくれた。私は夕食にはビールとごはんがなければならぬ。ドリンも自分もそうだという。

ある晩のこと、シンガポールからきているピーター夫妻も加わり、かれらが“ビーフ・サ

ター”（牛肉のヤキトリ）を焼いてくれた。実においしい。夢中で食べているうちに、ごはんが殆どなくなって、庭先でサターを焼いているピーター達には余り残っていないのに気がついた。「わるい、わるい。僕はこれでやめる」というと、ドナが、「ネバー・マインド。ピーター達の分はすぐできるから、遠慮せず食べろ」という。

「ドリン、何カップにしよう?」「2カップでいいだろう。」「そいちゃ水は6カップね」。そういう早い英語のやりとりには完全にはついていけないのでみていると、まず沸騰したお湯のなかに、袋からお米をそのまま2カップ投げ入れ、どういう火加減にしたかわからないが、ものの5分もすると「さあ、いっちょあがり」という訳である。

ドリンはかねがね、「自分は生れた時から米で育っている。だから食生活についてはあなた方日本人と同じだ」といい、確かに一般の西欧人にはわからない『おかずとしての牛肉』の位置づけにも正しい理解を示していた。

しかし生れてから30年以上、主食として米を食べ、自分は「米食民族」と主張するドリンにあって、このごはんに対する無神経さはどういうことなのであろうか。

これですべてがわかったという感じであった。マッシー大学の学生食堂だけでない。学長のレセプションもそうだったが、首都ウェリントンにいった時、ニュー・ジランド人の同僚にあそこはおいしいとすすめられていった中華料理やモンゴリヤン焼肉店などで、「ごはんがもうちょいまともなら」と思ったことが幾度かあった。

繰り返す迄もないが、洗いも、ひたしもしない米1カップを、3カップのお湯に入れて、5分間で“あがり”では、先に述べた、「べちゃべちゃで、芯があって、パラパラ」なごはんになることも十分ありうる訳である。

私はドナ達に、おかゆをたくのでなければ、水加減は1対1、洗った後少くとも10分ひたして、ふき上ったら弱火にして10分、火をとめてさらに10分の「3つの10」を教える。水洗いしたら米が水を吸収するから1対1はむつかしいなどとえらそうな口をきくが、従前の1対3よりはるかに良いに決っている。

### 3. 日本人・韓国人とごはん

話は変わるが、91年10月ウェリントンで、NZ 経済研究所に来ておられた明治学院大学の江橋さん、日本大使館の吉村さん、丸紅の段村さん達と会食した際、「こちらに来て、日本人の肉類の消費はどれくらい増えるか」の議論になった。日本に比べて「随分ふえた」から「余り変らない」迄あった。たった4人の人間が自分の家族の体験を中心に、「ふえた」、「変らない」と言い合っても、肉類の消費に影響する要因\*として、年代、出身地、来てからの年月などい

いろいろあるから話は収斂しない(\*価格や所得などの要因は殆どコントロールされている)。それでは差し当りニュー・ジランド在留邦人について、肉類消費を中心にアンケート調査したら面白かろうということになった。

いろいろ経緯はあったが、ニュー・ジランドだけではいかにも標本数が少な過ぎる\*ということで(\*日本人会に登録されている家族数は160~170, しかも単身赴任者が多い), 急きょシドニーにも調査の網を拡げることにした。その際、シドニーのJETRO, シドニーの日本人学校, シドニーの日本商工会議所他に大層お世話になった。

調査は4月中~下旬に実施し, 大まかな集計結果をたずさえ, 6月上旬お礼をかねてシドニーにお邪魔した。会議所で主として食料関係の会員の方にお話しし, いろいろ有益なコメントをいただいたあと, 近くの日本料理店で御馳走になった。串焼きで有名なところだそうだが, 「最近板前が変わっておすもいい, 恐らくシドニーではここが一番いいのではないか」ということで, おすすめに従い仕上げはにぎりにした。

このところ牛肉の需要分析などを一緒にやってきた早稲田大学の稲葉さんがパースの西オーストラリア大学にいられていたので, 今後の研究打ち合せも兼ねて, 今回の報告会にはお越し願っていた。

いろいろ肩の張るお礼や報告も終り, 3日目は2人だけで韓国焼肉屋に出掛けた。2月キャンベラの学会の帰途, 畜産振興事業団の安井さんがお昼を御馳走してくれたところで, 焼肉もキムチもおいしく, きわめて庶民的な雰囲気が入っていた。昼食時はサラリーマンで賑わうところだが, 夕方7時をすぎると客はわれわれ以外に1組みだけで, のんびりとくつろいだ。アルコールはBYO (Bring Your Own Bottle) で, おかみさんがお手伝いの女の子に近くの酒屋でワインを買ってこさせてくれた。そういう気遣いは旅行者にはいかにも心和むことだが, もっと嬉しかったことは, 義母のうちに泊った翌朝に出されるごはんを思い出させる「ぎんしゃり」の美しさ, おいしさである。

その晩(の勘定)は稲葉さんが持ってくれたのだが, ホテルに戻って氏が遠慮勝ちに云く「今日のが一番でしたね」と。2日目は上述の会議所のおごり, 1日目はチャイナ・タウンに出掛け, 地元の中国人のお客さんが多い, なかなか高級なところを選んだが, (ごはんが)「ベチャベチャ, ポロポロ, ガリガリ」で, 折角のシーフード料理も台無しであった。あとでシドニー駐在の商社の方に話したところ, 「あそこでそんな筈はないのですがね」と首をかしげておられたが。

私のアメリカでの経験からも, 中国料理店でごはんが駄目なことがあるのは, 珍しいことではない。2夏と1冬, ワシントン州とアイダホ州の州境いに住んで, 少くとも一週間に1

回は中国料理屋に出掛けていたが、学生達には一寸手のとどかない割と高級なところに行っても、ごはんが必ず許容範囲にあるとはいえなかった。共同研究者のリンさんや、かれの下で働いていた中国人の大学院生などに行ったものだが、料理で「あそこは良かった」「ここは今日は駄目だった」はしばしば耳にしたが、彼等中国人がごはんの良し悪しを問題にしたことは経験したことがない。

#### 4. 「こちらの人」になったらおしまい

ウェリントンから北東100キロくらい上ったマスタートンに、「住建日商」の合板工場がある。畑さんという工場長の下で300人くらいの人が働いており、日本から来た従業員が8名いる。上記の肉類の消費調査に協力していただいたこともあって、ウェリントンの帰り途1度お寄りした。私も17～8年前は木材のことをやっていたので、畑さんから専門の話でいろいろ参考になるお話を聞かせていただいたが、一番感銘を受けたのは「こちらの人になったら駄目ですね」の一言であった。日本から来ている人一般について言われたのだが「こちらの人になったら、何も高い月給を払って居てもらうことはない。うちの従業員もそうなりかけてきたら帰ってもらうことにしている」、「実は私もマレーシャに引き続いて単身赴任が長いから、会社には私もそうなりかけているからと申し上げて、来年あたり帰してもらおうと思っているのだが」と。

この一言はなかなか意味深長である。ニュー・ジランドの人は、仕事が終わってなくとも時間がくればさっさと帰ってしまう。私が明朝一番の飛行機で学会に行くことがわかっている、論文のタイプが仕上がっていようとなかろうと4時半になると姿を消す。上述のトニーの話ではないが、時間がくればあと3本ネジをしめなければならなくとも、職場をあとにする。明日から vacation に行くことがわかっているでもであろう。

私の牛肉関係の仕事で大層お世話になった日本ハムの日高さんの話だが、日本に出荷するときは日高さんは2～3日朝から晩迄工場にはりついて、特に最終の包装・箱づめの工程にきびしく目を光らせるのだそうである。「つめすぎではいけない」「ゆがんでつめてはいけない」「折り曲げてはいけない」と実に簡単な事柄だけれど、見てないと守られないし、あとからクリームがくると「どうして駄目なのか、英国やアメリカに対してこれ迄何十年も同じようにやってきて文句を言われたことはない。文句を言うお前達の方が悪い」ということになる場合がある。「英語でやりあってもラチがあかないし、勝ち目がないから、自分が出荷の前には工場につめる」といわれる。勿論その日はうちには帰れない。

しかし恐いもので、何ヶ月か何年かその社会に住んでいる内に、腹をたてたり、どなっ

たりする代り「まあそういうものだ」と思うようになる。セクレタリーに頼んだのでは何時になるかわからないから自分でタイプを打つという対応が生れる。マッシー大学の教授で教材のコピーを自分でする人もいる。その方が精神衛生には良いのだろう。しかし考えてみれば教授の給料は時給にして50ドルはする。セクレタリーの時給は10ドル以下かもしれない。矢張りここでは怒り、どなるべきなのである。

しかし段々なれてくると、自分自身も仕事が終わってなくとも時間がくるとうちに帰る、やりかけの仕事があっても vacation に出掛けるということになってくる。「そうきりきりするな、仕事だけが人生ではない。エンジョイ・ユア・ライフ」となったら、高い給料をもらって居座られては困るのである。

仕事の出来具合、製品の質についても、きた当座は、「これではうちの雀も食べない」と拒否反応を示すが、きびしさのない万事大まかの社会のなかで大雑把な食事に慣れていくなかで、「キバ」をぬかれていく。ねばつかない“フラフィー”なごはん、芯のあるごはんの区別が、やがてつかなくなる。もうそうなると「日本人」ではなく、ただ英語のうまくない“こちらの人”にすぎなくなる。

こういう人が日本についてしゃべっても、もはや真の迫力はない。かりにこの人達が GO サインを出しても、日本市場では売れない。見かけは良くても、どことなく「芯」があるのである。真の国際交流のためには、「こちらの人になったら」おしまいなのではなからうか。

### III・おわりに一言

年を取ると我慢が悪くなる。かつて恩師の1人を見ていてつくづくそう思ったことであった。もともと我慢の良くない私は次第に遠ざかった。可愛い気のない弟子であったろう。

昨年60歳を過ぎてニュー・ジランドに1年間すごした。エンジョイしたかと聞かれれば、“Yes, 御陰様で”だが、それは私が働きばちよろしくがむしゃらに働いたからであり、ニュー・ジランド（の滞在）そのものをエンジョイしたというのとは一寸違う。「得意だった」はずの英語がなかなか通じなかったこともあって、我慢が一層悪かったのは確かであろう。それにしても30代前半に初めてアメリカに留学した時とは随分違う。ヴェト・ナムのこと以外は殆ど全部感心し、圧倒された。その後の私を方向付け、motivate してくれた2年間であった。

今回のニュー・ジランド行きは、そういう意味では、どうも反対だったように思われる。正直いって殆んど感心することがなかった。肯定的になれないことが多かったし、やがてわ



が国もこうなったら大変と気を病んだことである。この1年間一緒に仕事をしたドリン・チャディーは、本文でもふれたようにカナダで教育を受けたモーリシャス人で、心情的にはニュー・ジランド（人）に対して私と同じ様な感じを持っていた。さもないならば私の我慢も中途で爆発したかもしれない。

ドリン夫妻にはとても良くしてもらった。他に私共の滞在を快適にしてくれた人として、エヴェリンとポウリンの2人の名を記しておきたい。エヴェリンは隣の農業システム管理学科の講師、いささか太目で見かまわれないようだがどうしてどうして。仕事は違ったが関係機関のコンタクトから、音楽会、ホテルの手配など実に細かく「世話を焼いて」くれた。幾度も自宅に招待されたが、いつも心憎いばかり手の込んだ料理で、余り食い意地のはっていない私も堪能した。ポウリンは広東料理ザ・マンダリン・ハウスの女主人。ニュー・ジランドの人にくらべると2/3くらいの小さな人だが、全身これ神経という人。滞在の後半は週1回は必ず行ったが、料理小盆2皿、ごはんとお茶はサービス、ハウス・ワイン半リッターで、いつもなんと20ドル(1,500円)。エビのエグ・フーヨンなど一寸火がとおりすぎているななどと思うと、さっとこちらの顔を読んでもう1回作り直させるという。いつもまけてもらっているのでそう厚意に甘えてはいられないが、次からはちゃんとこちらに合わせてくれる。ある晩子供連れのお客が多く、がやがやしていたし、従業員達のサービスが良くなかった。出口で支払いをしようとするときとやって来て、「今日はいらない、どうしてもといわれるならワインの代金だけ」と気を遣う。

ニュー・ジランドはもっと多くのポウリンを必要としているように思われる。

### <編集後記>

森宏所員は、約1年間にわたって、ニュージーランド（氏の表記法に従えば「ニュー・ジランド」）マッシー大学の客員研究員として過ごされ、本年9月に帰国された。その経験を大胆かつ率直に綴られた興味深い滞在記が本稿である。

在外経験の長い森所員の印象記だけに、軽快な筆致のなかから、異文化とつきあうことの難しさをあらためてわれわれに痛感させてくれる。最近の、アメリカでの留学生の悲劇的な出来事も想起される。ややレベルは異なるが、「真の国際交流」についての氏の見解は、昨今大きな話題になっている「技術移転」や「企業経営の現地化」のあり方などと考え合わせ、編集子にとっては興味深かった。 (N.S)

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 麻島昭一

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561

---